

3月15日（日）主日礼拝レジュメ

「一人も失われることがないために」 ヨハネの福音書18章1～27節

ヨハネの福音書は、イエス様のゲッセマネの祈りについては、1節に「これらのことを話してから、（17章のイエス様の祈りを指している）イエスは弟子たちとともに、キデロンの谷の向こうに出て行かれた。そこには園があり、イエスと弟子たちは中に入られた。」としか記していない。

2節には、「イエスが弟子たちと、たびたびそこに集まっておられたからである。」とありますが、これを裏付けるかのように、

- ① ルカの福音書21章37節では「こうしてイエスは、昼は宮で教え、夜は外に出てオリーブという山で過ごされた。」
- ② 22章39節では「それからイエスは出て行き、いつものようにオリーブ山に行かれた。」とあります。

イエス様はイスカリオテのユダが自分を捕らえるためにオリーブ山に来ることが分かっていたはずですが、ですから場所を変えることによって逃げることもできましたが、逆にユダに捕らえられるためにゲッセマネの園へ行かれたとも言える。

3節には、パリサイ人たちから送られた下役、すなわちユダヤ人と、ローマの兵士たち、つまり異邦人がキリストを捕らえるという共通の目的のために協力するという奇妙な図式が出来上がっている。ある意味、人となられた神の御子、救い主キリストに対して、ユダヤ人も異邦人も敵対しているような姿と言える。

4節を見ますと、イエス様は自らの意思で自分自身を彼らに引き渡したとも言える。そして「だれを捜しているのか」と尋ねられ、そこにいた人たちは「ナザレ人イエスを」と答えています。さらに5節でイエスは彼らに「わたしがそれだ」(エゴーエイミ)と答えられた。これは、ただ単に自分がその者ですと肯定的に答えたというよりも、自らが神であることを明らかにしている言葉だと言える。そしてキリストの全く人を恐れない姿、キリストの荘厳な様子、まさに神ご自身を現す「わたしがそれだ」とのことば、すべてが重なり合って、そこにいる人々に畏敬の念、恐れを与えたのだろう。9節「これは、「あなたが下さった者たちのうち、わたしは一人も失わなかった」と、イエスが言われたことばが成就するためであった」と言われています。これは10章28節、6章39節に、それを示唆するようなことばがありますが、もちろん文脈から言えば、イエスが捕らえられて十字架につけられることで、弟子たちは助けられるということがここでは言われていると思えますが、私は、このことばをずっと思い巡らしていた時に思わされたのは、イエス様が一人も失われないうように守っていてくださった、イエス様が弟子たちを決して見捨てられなかったということ。イエス様が捕まった時に弟子たちは逃げ出しましたがペテロは、遠くからイエス様について大祭司の庭の中にまで入って行った。しかし、イエス様が「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います。」と言われたことばどおりとなつて、ペテロは泣き崩れたと書かれてある。そしてイエス様が十字架にかかられた後、弟子たちはユダヤ人を恐れてかぎをかけて隠れていた。ヨハネの福音書21章では、イエス様の弟子となったはずなのに、ペテロが漁に行くと言って漁に出た。しかしイエス様はそのペテロに現れて「あなたはわたしを愛していますか」と三度尋ねられ、「わたしの子羊を飼いなさい」「わたしの羊を牧しなさい。」「わたしの羊を飼いなさい」と弟子としての使命を与えられた。弟子たちがどうあっても、決してあきらめたり、見捨てることなく導き続けて、イエス様はご自分のものである弟子たちを失わないようにしてくださった。それは弟子たちに対するキリストご自身の愛であり、あわれみで

あり、恵みです。キリストはご自身を信じて従う者を決してご自分の手から奪われることがないように、失われることがないように愛とあわれみと恵みをもって守ってくださる。自分の不甲斐なさにペテロのように泣き崩れるときも、神を忘れ、神のもとを離れて好きなように生きていると思っても、神は失われないように守ってくださる、恐れや悲しみや心の痛み、孤独に押しつぶされそうになっても神は愛の御手をもって私たちの手を放さず、失われないように守ってくださる。

11節のイエス様が言われた言葉を通して、ペテロのしたことは、決して勇敢で称賛されるようなことではなく、むしろ意味がなく、イエス様が父のみこころに従い、十字架への道を歩もうとすることを妨げるものだったことが分かる。ペテロは、イエス様が十字架への道を歩もうとしているのみこころを理解していなかった。

ゲッセマネの園で、まさにまことの神を人は捕らえて、不当な裁判にかけ、十字架につけて殺すということをしたのは、神の御子であるキリストご自身が、父なる神のみこころに従い十字架にかけられるために、自らを進んで捕らえに来た人々に与えられた結果だった。そして、「父がわたしに下さった杯を飲まずにいられるだろうか」と言われたとおりに、神がキリストに与えた罪への怒りと苦しみの杯を十字架の上で余すところなく飲み干された。それはただ愛のゆえだった。一人一人を罪から救うため、そして神のものとされて歩み、どんな中であっても最後まであなたはわたしのものと言ってくださり、失われることがないように、罪も死もサタンも何ものも神の御手から私たちを奪うことがないように、失われないようにしてくださるために、キリストは十字架の上で命を捨てられた。この受難節にもう一度私どもの罪のために十字架につけられたキリストをおぼえよう。